現実

私のアンソロジー 3

編集
解説 松田道雄

私のアンソロジー 3

現実

編集・解説

松田道雄

筑摩書房

私のアンソロジー　3

現実　編集・解説／松田道雄

編者略歴

松田道雄（まつだ・みちお）

1908年茨城県に生まれる。1932年京都大学医学部を卒業。初め困窮者の結核治療にあたり，戦後は開業医として幼児の治療にあたる一方，知識人のあり方やロシア革命に関する評論を発表。現在は著述に専念している。

（著書）「私は赤ちゃん」「君たちの天分を生かそう」「日本知識人の思想」「ロシアの革命」「革命と市民的自由」「恋愛なんかやめておけ」「われらいかに死ずべきか」等。

1971年11月18日　初版第1刷発行

発行者　竹之内静雄

発行所　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2—8
振替東京 4123　Tel. 291-7651
郵便番号 101-91

©1971
第3回配本　装幀／中島かほる
三松堂印刷・永興舎製本
1395-03303-4604

目次

I　さまざまの現実

ひとつの道　高見　順　3

からだに気をつけよ、勉強せよ　中野重治　28

現代退屈の諸様相　富士正晴　37

プレイボーイの子守唄　野坂昭如　46

愛と結婚の雑学的研究　倉橋由美子　58

ヤマトンチューの亡霊（沖縄）　五木寛之　76

三五五号室（その二）　井本　稔　86

猫のあしあと　伊丹十三　105

II　「私」の現実

人間生活と調和　伊藤　整　133
私生活　多田道太郎　142
憂いを増させるための人生論教室　なだいなだ　150
落書精神　花田清輝　162
死んだ海の呻吟　石牟礼道子　170
Ⅲ「公」の現実
見落された変数　清水幾太郎　185
「暴力と言論」以前のこと　折原脩三　207
忠誠心の映像　佐藤忠男　213
キリスト教の止揚をめざして　笠原芳光　233
入門以前ということについて　日高六郎　245
人民の自治とは何か　市井三郎　251
差別社会の中で　三橋修　262

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

対話ふうの解説　ほんもののある場所　松田道雄　275
著者略歴　301

I

さまざまの現実

ひとつの道——高見順

人生はうたかた？

私は明治四十年生まれである。五十歳の半ばをすぎた。ときに、わが過去をふりかえって、幾山河の感慨を抱かせられる。思えば、いろんなことがあったながい道を歩いてきたと思う。

日露戦争の直後に生まれた私は、小学校にはいると間もなく第一次世界大戦の勃発を知らされた。やがてロシア革命がおきた。その影響は日本にも及んだ。同時にアメリカニズムも日本を風靡した。モダン・ボーイとマルクス・ボーイの氾濫。昭和五年に私は大学を卒業した。不景気のどん底の時である。数年間、私は会社づとめをして、文筆生活にはいった。すでに満洲事変があり、戦線は中国へとのびた。太平洋戦争の時、私は報道班員として徴用されて、ビルマ戦線に従軍した。つづいて中国へも行った。

敗戦。混乱。私は胃潰瘍になり、更に胸をやられた。肉体がようやく立ち直ったらノイローゼになった。実にさまざまなことがあった。

ながかったと言えば、ながい、だが逆に、私の人生五十年はまたたく間に過ぎ去ったと、そう思う時もある。実に早かった。自分の青春時代が、ついこの間のような気もする。

人生はうたかたのごとし。私の若い頃は、そういった言葉がたえず出てくる古典を国語の教科書として学ばせられた。人生は泡のように、はかない。若い生命はしかし、そういう人生観に対して反撥を覚えたものだ。これから、ほんとの人生を迎えようとしている矢先に、人生とは泡のようなものだと言われても、とうてい承服できるものではなかった。たとえ、そうだとしても、自分は

自分の人生を、泡のようなものとは違う人生にしたいと思った。

人生がこれから始まろうとする若い生命、言いかえるとこれから花を開こうとするツボミに、花を開いても無意味だと言うのは、思えば実に残酷だ。人生はうたかたのごとしという無常観、仏教的人生観は、かならずしも人生の無意味を説いたのではないが、若い傷つきやすい魂をニヒルとデカダンに導きがちなのでもあった。私はしかしそれに抗した。

そうして五十年がまたたく間に終わった。今、私はわが五十余年の人生を顧みて、人生とはなんであったかと考える。人生はうたかたのごとしというのが、やはり真理だったか。

この連載エッセイの最後に書こうと思ったことを、最初に書きはじめた。これは、結論としてこのエッセイの最後に書こうと思ったことだが逆になってしまった。このエッセイはこんなわたくしごとめいた話を書くのが目的ではない。しかしそれを、もうちょっと書かせてもらう。

私は明治生まれであるが、作家として自立したのは昭和のことである。そこで私は昭和期の作家と言われている。この昭和時代というのを私は小説に書きたい、書きのこしておきたいと考えている。昭和時代とは何か。どういう時代だったか。この私は、そして私と同時代の人人は、この昭和期という時代をいかに生きてきたか。

それを私は書きたい。すでに書いてもいる。すでに三年半にわたって私が書きつづけ、最近その連載を終わった、『いやな感じ』という題の妙な小説が、それである。あるアナーキストの一生を書いたのだが、昭和時代というこの激動期をその人物がいかに生きたかという小説である。この小説より一年前に『激流』という長篇を雑誌『世界』に私は書きはじめ、まだ連載中だが、これも昭和時代を書きたいという念願のものである。

それらはいずれも、いわゆる私小説ではない。小説の主人公はこの私ではない。私の小説はおおむね今までは私小説だったが、昭和時代を書こうとする小説は私小説ではない。これはどういうわけか。

違った人生が……

昭和時代というのを小説に書こうとするとき、私とい

う作家は、私自身を主人公にした小説を書いたほうが、私らしい小説が書けるのである。そのほうが私に向いているのだ。言いかえると、そのほうが私という作家には昭和という時代が書きやすいのだ。

自分でそうと分かっていながら、しかも私はそういう小説を書かなかった。私の人生とは違う人生を書いた。それは私として、私が生きられなかった人生を、せめて小説のなかで生きてみたいという気持ちがあるからではないか。たしかにそういうところがあったようだ。

となると、それは私が、自分のこの人生を泡沫のごとく無意味なものだったと思っているせいか。自分が生きてきた人生とは違った人生を、ほんとうは送りたかったと思っているのではないか。

私は自分にこう問いかけながら、同時にひそかに読者にも問いかけている。諸君はどうか。どうなのか。諸君も、ときに、こういう思いにとらわれることはないか。若い読者はまだ、そんなことはないだろうが（しかしこれは若い読者にも無縁の事柄ではない）私と同じような年の読者には、ときに、自分の送ってきた人生に対して、ほんとうはもっと違った人生だったはずだというような思いを抱くことはないか。自分にはもっと違った人生があったはずだと思うことはないだろうか。

もっと輝かしい、もっと恵まれた人生を、自分は持てたはずだったのだが……。と、こういう思いを抱くのは、一般に、自分の人生を不遇と見ている人である。栄達の人生が自分にもあったはずと考える。だが、自分の人生とは違う人生を生きたかったと思うのは、かならずしも不遇の人々だけではない。栄達の人生を持った人もまたときにそういう思いに駆られるようだ。

旧制高等学校で私と同級だったM君のことを私はここで思い出す。大学は学部が違って分かれ分かれになったが、M君は大学を出ると、ある銀行にはいった。一流の銀行である。

M君は今は故人だが、数年前に死んだときは、その銀行の常務だった。一流銀行の常務という時めいた人生だったが、その常務時代のあるとき

「僕もほんとは作家になりたかったのだ」

しみじみと私にそう言った。何かの会で、そのM君と私が顔をあわせたとき、二人だけで飲もうと、その会のあと、彼のおなじみの料亭に私を誘った。一流の銀行家

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c

にふさわしいこれも新橋一流の料亭である。呼んだ芸者がまだ席に現われない前、二人だけで飲んでいるうちに、彼がこんな述懐を口にした。

「僕は父を早くなくして、母に育てられた。その母に嘆きをかけちゃ気の毒だと言って、僕は学校を出ると銀行にはいったのだが、ほんとは、僕は文学青年だったのだ。だが、母のことを思って、自分のわがままを通せなかった」

私は自分も母の手で育てられた者として、自分の往年のわがままが改めて回想され、胸が痛んだ。私たちの若い頃は、ちゃんとした家庭の子が、作家になりたいなどと親に言ったら、それこそ勘当されかねない時代だった。今は作家も有利な職業と見られるようになったためか、子を小説家にしたいと、母親のほうから逆に、私たち作家のところへ弟子入りを頼みにくるありさまだが、昔を思うと感慨無量だ。

「いわば親孝行のために、僕は僕の望んだ人生と違う人生をすごすことになった」

とM君は言ったが、これはいわゆる不遇の人物のぐちではない。だから贅沢なぐちとも言える。社会的にも経済的にも何の不満もない状態だけに、かえってこんなぐちが出てくるのか。

精一杯生きる

ほんとは作家になりたかったのだと言うM君は、いわゆる不遇の人物ではなかった。自分の人生を失敗の人生と見て、そう言ったのではない。自分を不遇と見て、そのために、違った人生を送りたかったと考えたのではない。

不遇な人間だけが、自分の人生と違う人生を考えるとはかぎらないのである。M君の場合で、それが分る。M君の人生は客観的に栄達の人生であるだけでなく、主観的にも自分を不遇であるとは思ってなかった。しかも、そうした人生とは違う人生を送りたかったと考える。

自分の人生に対して、ときに、ふと何か空しさを覚えたのだろうか。人生とはうたかたのごとしと言った無常感が、彼の心に忍びこんだのかもしれない。

M君は私にこんな告白をしてから間もなくガンになった。すでになっていて、生命力が弱まっていたのかもしれない。そのための、私への告白だったのかとも思える。

私が私の人生とは違う人生を考えるのも、私の生命力が弱まっているためか。だが、私自身は現在の私を、かつてない元気さだと思っている。かつては病弱だった私が、今はひどく元気である。

話をここで私自身に戻す。私は自分の人生をふりかえるとき、それが悔いにみちみちていることを感じる。自分の人生を思うと、悔いがまざまざとよみがえる。私が自分の生きられなかった人生を、せめて小説のなかで生きてみたいと思うのも、そうした悔いの故に違いない。

では、その私は、自分が生きてきた人生とは違う人生をほんとは送りたかったと思っているのか。そうなると、私は直ちに、うんとうなずくことはできない。なぜか。

悔いにみちた人生ではあるが、それが私にとって、私の人生だったのだ。私としては精一杯生きてきた人生である。それと違った人生を、はたして私が持ちえたかどうか。悔いにみちたこの人生こそ私の人生で、それ以外に私の人生はありえなかったのだ。

それは私が私の人生を、悔いにみちた人生にせよ、不遇の人生だったとは思わないからか。事実、私は私の人生を不遇とは思わない。と同時に、私の人生を何も栄達の人生だとも思っていない。つまり客観的に私の人生がどうあろうと、私のこの人生しか私にはなかったのだ。人生とは私にとって、私の人生しかないのだ。

私はまだ私の人生が終わったとは思わない。これからの人生を思うとき、私は何も達観した人間ではないから、もっと輝かしい仕事をしたいという野心はある。しかし過ぎた人生に対して私は、たとえ悔いにみちた人生でも、それがとりもなおさず私の人生にほかならないのだと思う。

ここでまたM君のことを思い出す。私に前述のような告白をしたあと、間もなく彼は病いに倒れた。彼は死に際して、自分の人生は、いつわりの人生だったと悔いたろうか。自分の望んでいた人生とは違う人生を送ってしまったという悔恨で、彼は死を迎えただろうか。

違うと思う。彼は彼なりに、自分の人生を精一杯生きてきたのだ。精一杯生きてきたということでは悔いがなかったはずだ。

精一杯生きてきた人生だが、そうした人生とは違った人生を彼は考えた。栄達が人生の目的ではないからだ。だから、彼も自分の栄達の人生のほかに、違った人生の

存在を考えた。しかしM君は死に際して、自分の人生を否定しはしなかったと思う。人生の目的は、人生を生きること自体のなかにあるからだ。

人生とは、それぞれの人生を、精一杯生きることである。その生きることのうちに、人生というものがある。

職業を選ぶ時

ケネディ大統領の就任式のとき、アメリカの最長老の詩人が祝いの詩を書いて、みずからそれを読んだ。そういう新聞記事を当時私は眼にしたことがある。そのまま読みすごしていたのだが、その詩人とはかねて私の尊敬しているロバート・フロストなのだと、のちに知った。

このフロストの詩に「通らなかった道」というのがある。それは次のような詩句ではじまっている。

Two roads diverged in a yellow wood,
And sorry I could not travel both……

黄色い林に二つの道が分かれていて、私は残念ながらその両方の道を歩んで行くということはできなかった。そういう意味である。フロストの言うこの道とは、人生の道と解することもできる。この人生において、二つの道を同時に旅することはできなかった。フロストはそう言う。それはフロストだけのことではなく、人間は誰でも、人生における二つの道を歩むことはできないのだ。

私の人生は、作家というひとつの道を歩んできた人生だ。M君の場合も、銀行家というひとつの道しか歩めなかった。しかし学生時代の彼の前には、彼の告白によると、二つの道が分かれていた。文学青年だった彼は、ほんとは作家の道を歩みたいと思ったのだと私に言った。だが、その道を選ぶことは、彼を育ててくれた母に、悲しみを与えないではおかない。彼の前には、不安にみちたそうした道のほかに、もうひとつ、母に安心と満足を与える道があった。彼は母に悲しみを与えまいとして、このほうを選んだ。

彼も二つの道を歩むことはできなかったのだ。彼はこうして銀行家になった。

銀行家としての人生を彼は送った。この道は彼自身が選んだのではあるが、母に悲しみを与えまいとして、やむをえず選んだのでもある。彼自身としては、みずから進んで選んだという気持ちからは遠いかもしれない。すくなくとも、これ以外に自分の生きる道はないとして、

この道を選んだわけではないという、そうした気持ちが彼にはあったようだ。晩年に彼が、自分はほんとは作家になりたかったのだと私に告白したのも、そのために違いない。

私がひとつの道を選んだのと、彼がひとつの道を選んだのとは、そこに大きな相違がある。

彼が選んだひとつの道は、いわば職業という道である。作家という私の道も、職業には違いないが、職業としてやむをえず選んだという気持ちはそこにはない。みずから進んでこのひとつの道を選んだのである。

何もこれを私は自慢するのではない。これは私のわがままからだった。わがままを通しただけである。職業をこのようにわがままに選べたことを私は幸運と思ってはいるが、人に向かってそれを自慢するほど傲慢になりえない。一般的に言って、職業とはこう行かないものだからだ。こう行かないのが、職業だとも言える。

では、職業とは何か。人はこの世に生きるためには、かならず職業を持たなくてはならない。親ゆずりの財産で、何の職業も持たずに暮らして行ける人もあるだろうが、それは例外とせねばならぬ。一般的にはそうはいかない。多くの人は、生きて行くために、職業を持たなくてはならぬ。

そしてその多くの人にとって、自分の職業というのは、みずから進んで選んだ職業であろうか。この世に生きて行くために人が職業を選ぶとき、おそらくはM君のような場合が多いのではないか。

すると、M君のような告白を、誰でもが胸に秘めているのだろうか。今の職業とは違う、ほんとの人生が、ほかにあったはずだと思いながら、人はみな生きて行かねばならないのだろうか。

天職と職業

M君は母に歎きをかけまいとして、ほんとは自分の選びたいと思った道を歩まなかった。このM君のような親孝行の気持ちで職業を選ぶ人は、今日おそらく少ないだろう。

自分の気持ちで選んでいる。進んで選んだという気持ちかもしれない。しかし事実は、自分自身の将来に安心を持ちたいという気持ちから職業を選んでいる場合が多い。M君のように、母に安心を与えたいというのでなく、

自分に安心を与えたいという気持ちである。それが、みずから進んで選んだという気持ちをその人に与えているのだろうが、根本のところはM君と同じなのだ。いつの日にか、M君と同じような告白の衝動がその人の胸にこみあげてくることだろう。

意地の悪い言い方のようだが、私は自分をみずから進んで自分の職業を選んだ者として、そうでない人を意地の悪い眼で見ようとするのではない。この私も、前に書いたように、時にふと、自分が生きてきた人生とは違う人生を考えるのである。なぜか。一遍に何もかも言うことはできないから、それは後に譲るとして——。

自分の人生とは違う人生を考える。それは具体的には、自分の現在の職業とは違う職業を考えるということである。みずから進んで現在の職業を選んだのではないという気持ちが、そこにあると、事情はいよいよ複雑になる。

多くの人にとって、職業とはそういうものである。となると、人は総じて、自分の職業に対して、これはやむをえず自分が選んだ職業なのだという、にがいおもいで、この人生を生きねばならぬのか。違った人生が、ほかにあったはずだという、にがにがしいおもいで人生をすごさねばならぬのか。

前回にロバート・フロストの詩を出したがあれとは違う、ひとつの詩に、次のような詩句がある。

My object in living is to unite
My avocation and my vocation
As my two eyes make one in sight.

直訳すると、こうである。生きることの目的は、私の場合、自分の職業と使命とを一致させることだ。眼は二つあっても、見えるものはひとつなのと同じように。

ヴォケーションを使命と訳したが、天職という訳語もある。これが自分に与えられた使命だという気持ちで仕事をする、それが天職である。使命感の持てる職業、それが天職である。この天職を使命と訳したのは、職業と天職と並列させると、まぎらわしいと思ったからだ。

フロストは職業と天職とを一致させている。詩人フロストにとって詩を書くことは天職で、そして詩で生活することが職業である。詩人という天職と、詩人として生活する職業とを彼は一致させることができた。だが、これは誰にでもできることだろうか。現在の社会では、天職と職業とを一致させることは、なかなかむずかしい。

だからこそ、M君のような告白もでてくるのだ。しかし、むずかしいということは、できないということではない。

むずかしいにもかかわらず、天職と一致した職業を選んでいる人が、実際にはたくさんいる。だが、天職と思って選んだ職業が、現在の社会では、単なる職業にすぎないものになってしまう。そういう場合も多い。たとえ確固たる使命感を持って、自分が進んで選んだ天職でも、実生活のなかではそれが天職と職業との一致ということにはならないで、やむをえず選んだ職業とかわりのないものになってしまう。いわゆる組織のなかで働いている人に、この悲哀が多い。

天職と一致した職業を選ぶのがむずかしいだけでなく、選んだその天職が現実のなかでいつか風化して単なる職業になってしまうところに、真のむずかしさがある。そしてここに、今日のにがい問題がある。

覚兵衛の懺悔

フロストは職業と天職とを一致させることに、生きる目的があると言う。彼はその詩で、自分の生きる目的はそこにあると言う。これは彼だけのことでなく、一般にそうだと言っていいだろう。

生きる目的とは、平たく言えば、生きがいである。職業と天職の一致にこそ、そうした生きがいがあるということは、職業と天職とがもし一致できなかったら、生きがいがないということである。すると、天職と一致してない職業で生きている人々は、生きがいのない人生を生きているのか。

前回で私は、職業と天職との一致は、現在の社会、今日の現実ではむずかしいことだと言った。言いかえると、今の世に生きる人は、ほとんどみな、生きがいのない人生を送っているということになる。理窟から言うと、そういうようになる。

M君の人生は、生きがいのない人生だったろうか。死に際して、彼は自分の人生をそういうふうに否定したろうか。そうではなかったろう。人生の目的は、人生を生きること自体のなかにあるからだと、さきに私は書いた。これを、職業と天職の一致という問題から見ると、どうなるか。

私はここで、私が戦争中に読んだ本のなかの、ある話を思い出した。理窟はちょっと、ひと休みして、その話

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.c